



■ 慰霊碑を囲む被災者刻銘碑

黒御影石の刻銘碑を、慰霊碑と建屋を囲むように設置した。その刻銘碑には、津波の犠牲になった市民や市内で亡くなった人々のうち遺族の意向を踏まえ、1709人（竣工時点）の方々の御名前を刻んだ。



■ 被災松を利用し、気仙大工の技術を用いた小屋組

東日本大震災の津波による被災松が保存されており、小屋組の1/3は被災松を利用した。加えて、その小屋組は、気仙大工の特徴である持ち送りの技術を利用して形成している。



■ 慰霊碑建屋、水盤、休憩所、それらを囲う植栽帯

海側に慰霊碑の建屋、街側に慰霊碑の建屋とほぼ同規模の休憩所、二つの建屋の間に気持ちを切り替える目印としての小さな水盤を設けた。周縁は盛土と樹木により囲いを形成している。



陸前高田市東日本大震災追悼施設
The Great East Japan Earthquake Memorial Facility

一連の施設群の中で、この小さな建物がわたしにとってなによりも大切な建物であることは間違いない。市民がさまざまな想いを抱いて追悼祈念するための慰霊碑。ここが新たな街の始まりであり戻ってくる場所でもある。

気仙大工の技術を使ってほしいという要望を受け、松材を使った持ち送りの組み物で屋根を構成した。慰霊碑の周りの空間は抜けのよいものにしたかったので、八本のスチールの柱を立て、それに乗せかけるように木組みを一体化する方法をとった。

高田松原の被災松の中で使えそうなものをできるだけ使わせてもらった。小屋組の三分の一はこの被災松で構成されている。かつて海際にあった慰霊碑を中央に置き、それを守るように松の架構が屋根部を形成し、その周りを黒御影の腰壁で囲んで亡くなられた方々の御名前を刻んだ。

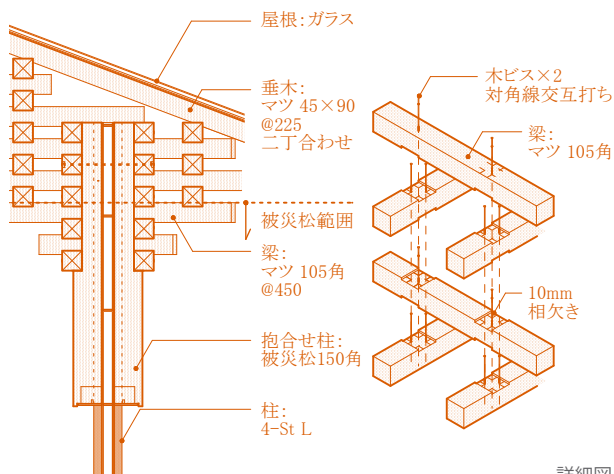
広場の反対側にはほぼ同じ大きさの休憩所を設け、二つの建屋の間に小さな水盤を設けた。日常と非日常の境目には、美しい水が必要だ。水面の向こうに何を見るかは人によって違うと思うが、古来より水盤は日常からの離脱装置だ。国営追悼祈念施設でも気持ちを切り替える目印として水盤を置いたが、ここでも水盤は大切な役目を果たしている。

建築家 内藤 廣

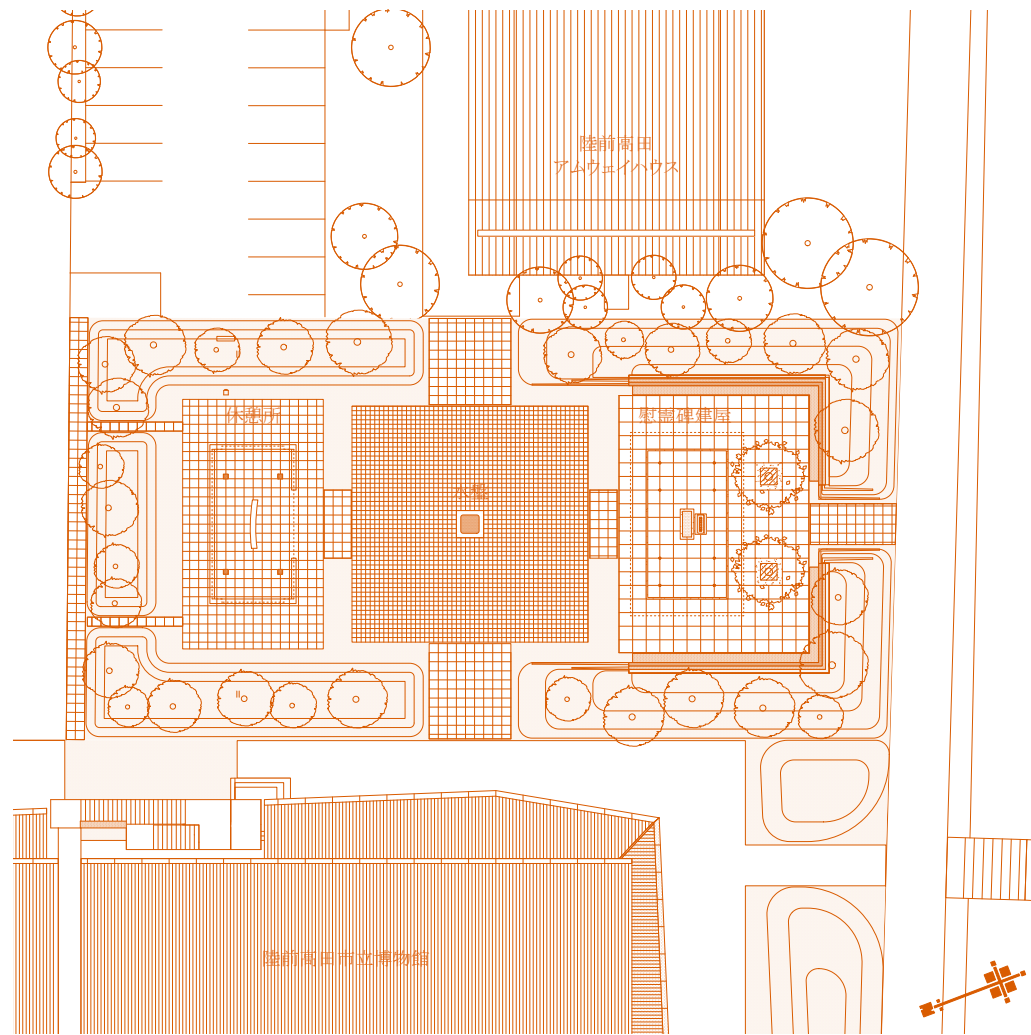
建築概要

- [所在地] 陸前高田市高田町字並杉 300-1
- [建築主] 陸前高田市
- [設計・監理] 内藤廣建築設計事務所(建築)
KAP(構造)、森村設計(設備)
- [施工] 鈴木建設
- [施工協力] 鹿兒島屋(被災松支給)
菊池工業、金野鉄工(鉄骨)
スズキ電機(設備)
- [竣工] 2022年3月
- [敷地面積] 1,531.97㎡
- [建築面積] 268.42㎡
- [延床面積] 51.84㎡
- [規模] 地上1F
- [構造] S造一部木造

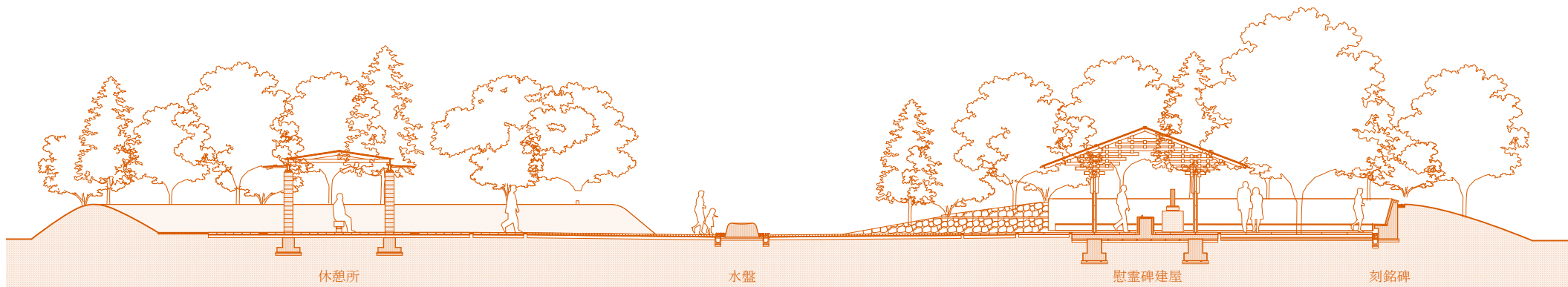
パンフレット製作：内藤廣建築設計事務所



詳細図



配置図



全体断面図